日本語におけるイタリア語由来の外来語について
明治期を中心として

Valentina Spitale

ABSTRACT

Linguistic Loans from Italian into Japanese: focusing on the Meiji Period

The history of cultural exchanges between Japan and Italy can be traced back to the second half of the 16th century. However, it was only in the Meiji era that Japanese and Italian began to come into contact, and that *gairaigo* (loanwords) of Italian origin began to emerge in Japanese.

Gairaigo of Italian origin can refer both to Italian words borrowed directly from Italian, and to words of Italian origin borrowed indirectly through other languages. The aim of this study is to examine the *gairaigo* of Italian origin that entered Japanese during the Meiji period, in order to shed light on their characteristics and their borrowing route.

The corpus for this study has been compiled by selecting the words with their earliest recorded use in the Meiji era, drawing from the general lists of Italian loanwords in Koura (1997) and Calvetti (2003). In order to find clues to their route, I examined the first Italian-Japanese dictionary, the *Futsu-I-Wa sangoku tsūgo* by Magaki Yukinaga, published in 1876, then carried out an analysis of the corpus from a phonetic perspective.

I also traced the history of four words, selected to represent the fields in which the influence of Italian is stronger: “opera”, “madonna”, “chiaroscuro”, and “macaroni”.

The results of this study suggest that these Meiji loanwords entered the Japanese vocabulary through an indirect route and underline the importance of Italian as an international cultural language in the field of the arts, and especially of music.

1. はじめに

イタリア語に由来する外来語が日本語に導入されはじめたのは、明治期に入ってからである。しかし、イタリア語由来の外来語と言っても、直接イタリア語から日本語に入ったものと他の言語を通じて間接的に導入されたものの二つに分けられる。イタリア語由来の借用語全体を検討した研究がいくつかあるものの、明治期を徹底的

に調査した研究はまだ見られない。そこで本稿では、明治期に導入されたイタリア語を原語とする借用語を取り上げ、その特徴や伝達ルートを明らかにしたい。

古浦（1997）と Calvetti（2003）は、いくつかの外来語辞典を調査し、イタリア語由来の外来語について論じているが、ここでは、その調査結果を基に量的な観点からイタリア語由来の語彙の変遷を検討したあと、同研究の項目リストに基づき借用時期が明治期とされている事例のリストを作成し、そのルートを中心に論じる。最初の伊日辞書である『佛伊和三國通語』に現れる外来語を紹介したあと、音声の観点から事例の分析を行い、ルートの手がかりとなる特徴を考察する。次に、明治期におけるイタリア語由来の語彙全体を取り上げ、そのルートについて論じる。

また、外来語のルートを正確に探るには、その語誌を明らかにする必要があると思われる。そこで、4 つの個別語について考察する。本稿で取り上げる単語は、音楽用語の「オペラ」、美術用語の「マドンナ」と「キアロスクロ」、料理用語の「マカロニ」である。

イタリア語由来の外来語の特徴や伝達ルートを探ることよって、日伊文化交流の歴史の理解が深められ、イタリア語が日本語にどのような影響を与えたのかが明らかになると思われる。

2. 近代日伊文化交流史概観

イタリアと日本の文化交流の歴史は、16 世紀後半にさかのぼることができる。その頃から 17 世紀前半にかけてイタリア出身のイエズス会の宣教師が 40 人ほどキリスト教布教のために来日し活躍していた。その数は、日本を訪れたカトリック教会の外国人宣教師全体の 2 割強にのぼる。その中で特に注目に値する人物の一人は、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）司祭である。

ヴァリニャーノは巡察師として 3 回も日本に渡来し、当時の日本の教会に大きな影響を及ぼした。可動式の金属活字印刷機を初めて導入し、キリシタン版と呼ばれる出版物の刊行を立案するなど、重要な役割を果たした。

また、ヴァリニャーノは初めてイタリアを訪ねた天正遣欧少年使節と呼ばれる遣欧使節の企画を発案した。この使節団は、4 人の日本人少年を中心とし、スペイン・ポルトガル宮廷とローマ教皇に日本を紹介し、日本での布教への援助を依頼すると共に、日本人にヨーロッパを見せるという二つの目的があった。そして、1885 年にフィレンツェやローマを訪問し、教皇グレゴリウス 13 世に謁見した。

その次にイタリアを訪問したのは、伊達政宗によって派遣された慶長遣欧使節である。この使節団は、仙台藩士の支倉常長 （1571-1622）

とスペイン人フランシスコ会宣教師のルイス・ソテロ（1574-1624）を中心とし、1615 年にスペイン国王フェリペ 3 世とローマ教皇パウルス 5 世に謁見した。

このように日本とイタリアは交流を重ねていたが、その内容はキリスト教の布教活動を中心としていたため、1612 年に徳川幕府によってキリシタン禁教令が発されたあと下火となり、18 世紀初年に絶えてしまった。

禁教令下の日本に潜入した最後のイタリア人宣教師は、ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ（1668-1714）神父である。 シドッティは 1708 年に来航し、江戸期の最後の宣教師となった。彼を尋問した新井白石がそこで得た情報をもとに『西洋紀聞』という書物を書いた。

鎖国時代の空白を経て、日伊の交流が再開されたのは 1866 年であった。その年の 6 月にイタリア使節ヴィットリオ・フランチェスコ・アルミニョン（1830-1897）が、軍艦マジェンタ号に乗船し、良質の 蚕卵紙購入を目的に、初の日伊修好通商条約を結ぶために来日した。

明治期に初めてイタリアを訪問した日本の使節団は、岩倉使節団である。岩倉使節団は、明治 6 年（1873）にイタリアに到着し、フィレンツェ、ローマ、カゼルタ、ナポリ、ヴェネツィアを訪問した。

開国以降、日伊間の文化交流は決して少なくない。イタリアは日本と政治的に密接な関係を持っていなかったが、お雇い外国人として招聘されたイタリア人が特に芸術や軍事の分野に深い影響を与えて活躍した。陸軍の指導に当たったイタリア人としてポンペオ・グリッロとシピオーネ・ブラッチャリーニが挙げられる。グリッロ少佐は、明治 17 年（1884）に来日し、明治 21 年（1888）に帰国するまで大阪造兵廠で兵器製造技術の指導をした。ブラッチャリーニ少佐は、明治 25 年（1892）に来日し、一年間弾道学の基礎を指導した。彼が考案した測遠器は世界的に有名で、測遠器を作成するために雇用された。フランス人やドイツ人に比べると、軍事の分野において影響を与えたイタリア人の数は少ないが、優れた功績を残している。

美術の分野においては、銅板画家のエドアルド・キョッソーネ（1833-1898）が顕著な功績をあげた。キョッソーネは、大蔵省紙幣局 寮（後の内閣印刷局）の招聘によって明治 8 年（1875 年）に来日し、近代的な製版法や印刷技術を指導した。彼の指導によって、紙幣や切手の国産化が成功したと言われている。紙幣局の仕事と共に、キョッソーネは明治天皇や西郷隆盛など明治の元勲の肖像画を銅版画やコンテ絵として残した。紙幣局を退官後も、日本に永住し、明治 31 年（1898）に東京で生涯を終えた。

日本初の美術教育機関であった工部美術学校が明治 9 年（1876）に設置され、講師として招致された外国人は全てイタリア人美術家であった。芸術の分野に秀でた人物として画家のアントニオ・フォンタネージ（1818-1882）とアキッレ・サンジョヴァンニ、建築家のジョ ヴァンニ・ヴィンチェンツォ・カッペレッティ(1843-1887)、彫刻家 のヴィンチェンツォ・ラグーザ（1841-1927）などが挙げられる。

フォンタネージは、明治 9 年（1876）に日本政府の招聘によって工部美術学校の創設と共に来日し、明治 11 年（1878）に帰国するまで同校で洋画の指導に当たった。彼の門下生には浅井忠、松岡寿、山本芳翠など、後に明治期の洋画界で活躍した人物が数多くいた。サンジョヴァンニは、フォンタネージの後を継いで明治 13 年（1880）に来日し、同 16 年（1883）に工部美術学校が廃校になるまで画学の指導を行った。この二人は、近代日本洋画の発展に大いに貢献した。

カッペレッティとラグーザは、フォンタネージと同じく明治 9 年（1876）に来日した。カッペレッティは、明治 12 年（1879）まで美術の予科の講座を持った。その後、建築家として活躍した。ラグーザは、明治 15 年（1882）まで彫刻の指導を行った。帰国後、パレルモ市で工芸学校を創立し、同校で 6 年間日本美術を教えている。

さらに学術関係においては、アレッサンドロ・パテルノストロ(1852-1899)が司法省顧問と明治法律専門学校の講師として活躍した。パテ ルノストロは明治 22 年（1889）に来日し、明治 25 年（1892）に帰国。 帰国後は、「伊学協会」の創立に協力した。

日本におけるイタリア語教育に関しては、アルフォンソ・ガスコの名前が挙げられる。ガスコは明治 15 年（1882）に来日し、東京外国語学校と京都帝国大学でイタリア語を教えた。大正 13 年（1924）から昭和 11 年（1935）まで在神戸総領事を務め、昭和 12 年（1936）に神戸で死去した。

一方、日本からは、明治 27 年（1894）から 45 年（1912）まで文部 省留学生が 21 名イタリアに派遣されたが、いずれもイタリアだけではなく、他のヨーロッパ諸国にも滞在した。また、渡欧してイタリアを訪れた旅人は少なくないが、ほとんどの場合、イタリアは第一の目的地ではなかった。イタリアへの渡航者の多くは、美術関係者であった。最初に記されたイタリア旅行記は、宗教学者の姉崎正治が著した明治 42 年（1909）発行の『花つみ日記』である。 これは、 明治 35 年（1902）のイタリア旅行を記録したものである。

以上に述べたように、近代において日本とイタリアの間で文化交流が行われていたが、それは日本語がイタリア語に影響を受けることにつながったのであろうか。江戸期には、当時の宣教師が日本で使用していたリングワ・フランカ（共通語）が主にポルトガル語で

あったため、ポルトガル語は日本語と接触し日本語の語彙に影響を与えたが、イタリア語の影響は見られなかった。

日本語がイタリア語と接触しはじめたのは、明治以前に見られるいくつかの地名の例を除いて、[1] 明治期に入ってからである。明治 9 年(1876)には、初の伊和辞典と言える『佛伊和三國通語』が東京で出版されている。外国との交流が再開されたあと、様々な言語を通じて西洋の文化に接し、ヨーロッパ諸国の言語から多くの語彙が日本語に入りはじめた。しかし、イタリアとの交流があったものの、イタリア語由来の外来語は比較的少なかった。上述したように明治前期に日本の美術界に大きな影響を与えたイタリア人が何人もいるが、なぜ美術用語においてはイタリア語由来の外来語がこれほどにも少ないのであろうか。

それは、フォンタネージたちによる工部美術学校の講義がイタリア語ではなく、フランス語で行われていたからである。工部美術学校におけるフォンタネージの講義の記録である『フォンタネージ講義』が残っているが、これはフランス語で行われた授業を武村本五郎が和訳したものである。イタリア語の通訳が務められる人物はいなかったのであろう。

パテルノストロもまたフランス語で授業を行っていた。当時、法律の分野では、フランスの法律家、ギュスターヴ・エミール・ボアソナード(1825-1910)らの影響で、フランス語が大きな役割を果たしていた。1889 年に出版された『法理学講義』は、明治法律学校におけるパテルノストロによる講義の記録であり、宮城浩蔵の訳によるものである。宮城は、フランス法学者、リベロール、ブスケ、ボアソナードにフランス法を学び、パリ法科大学及びリヨン大学に留学した人物である。パテルノストロが著した『法理学講義』(1889)や『法律学』(1898)に目を通してみると、フランス語を原語とするカタカナ語が目立っているのである。このことから、パテルノストロはフランス語で講義していたと思われる。

以上、近代における日伊文化交流史を概観したが、イタリア語由来の語彙の伝達ルートを探ることよって、日伊文化交流の歴史の理解が深められ、イタリア語が日本語にどのような影響を与えたのかが明らかにしていきたい。

3. 先行研究

[1] Nagami-Nannini (2006)は、新井白石著の『西洋紀聞』（1709 年）に Sicilia に対応する「シシー リヤ」「シシリヤ」と Italia に相当する「イタリヤ」「イタアリヤ」（当て字もある）が出現すると指摘している。

日本側にもイタリア側にも、文献はいくつかある。日本においては外来語に関する資料は豊富であるが、イタリア語由来のものを扱った研究は比較的少なく、主に日本語における外来語を原語別に調査した昭和前期・中期のものである。大正期から第二次世界大戦の頃まで外来語が急速に増加し、日本人の外来語に対する意識も高まった。大正時代から外来語辞典が出版されはじめ、外来語の研究が盛んとなったが、昭和戦前までその原語についての研究が主であり、その中でイタリア語は原語の一つとして扱われている。しかし、イタリア語由来の借用語を中心とした調査は一つしかなく、それは最近のものである。一方、イタリアにおいては、日本語とイタリア語との接触に関する研究が近年に現れ、それは日本語におけるイタリア語由来の語彙を中心としたものである。そのため、便宜上、先行研究を二つに分け、イタリア語を原語とする外来語について通時的な観点から考察している研究に注目し、まず第一節ではイタリア語由来の外来語にふれている日本側の外来語・語彙についての調査をいくつか紹介する。そして、第二節では日本語におけるイタリア語由来の借用語に関するイタリア側の研究を取り上げることにした。

3.1 日本における先行研究

日本においては、市河三喜が『ことばの講座』(1931)に収録された講演の中で、後述する楳垣実に先立って、イタリア語を原語とする外来語にふれている。市河は、ここでは以下のように述べている。

> 音樂はイタリーが盛でありますから、自然イタリー語が優勢であります。(市河 1931:104)

さらに、いくつかのイタリア語由来の音楽用語の例を挙げ、一般化した「テンポ」という単語がその一つであると指摘している。また、そのルートについて以下のように述べている。

> 音樂に於けるイタリー語と同様、フランスからの直輸入ではなく、英語を通してはいつて來たものが多いやうであります。(市河 1931:111)

外来語研究において、最初にイタリア語由来の外来語について記述しているのは、楳垣実である。楳垣は 1943 年に出版された『日本外來語の研究』の中で明治期から昭和初年まで出版された 6 種の代表的な国語辞書を取り上げて、その辞書の「ア行」を材料に外来語の変遷や傾向を調べている。楳垣(1943)の調査によれば、イタリア語由来の外来語は、大正 10 年(1921)版の『言泉』に 8 語(「ア行」の

外来語全体の 2.5%）が記録され、昭和 9 年（1934）版の『廣辭林』に 6 語（「ア行」の外来語全体の 0.9%）が収録されている。ここから、他の言語と比べると、イタリア語を原語とする見出し語の数は少ないが、大正期国語辞書に収録されるほど定着していた事例があったと言える。

また、楳垣（1943）は、明治後年発行の『辭林』と昭和初年発行の『廣辭林』を比較して、専門用語が国語辞書に取り入れられるようになったことに注目し、イタリア語由来の外来語に関して以下のように述べている。

> ロシア語、イタリア語、ラテン語の増加は、ドイツ語、フランス語に比べて極くわづかではあるが、ロシア語はソヴィエト聯邦の新語の輸入が主であり、イタリア語は音樂用語、ラテン語は主として哲學用語の増加である。（楳垣 1943:233）

つまり、イタリア語由来の語彙は増えてはいるが、この増加は主として特定の分野において現れた現象である。英語、フランス語、ドイツ語など、直接的な交渉を持っている国の言語の増加と違い、イタリア語のような間接的な接触の場合、その言語に由来する語彙の増加は、その言語の影響が大きくなったからではなく、伝達言語に影響が強い分野の専門用語の成立過程が進み、その用語の語彙数が増加しているからであると考えられる。

イタリア語由来の語彙の伝達ルートについて、楳垣（1943）は以下のように指摘している。

> イタリア語を語源とする外來語も多いが、それらの語は主として音樂用語であつて、英語とか佛語、獨語を通じて入つたものと思ふ。（楳垣 1943:270）

次にイタリア語を原語とする外来語にふれているのは、同年に出版された荒川惣兵衛による『外來語概説』である。荒川（1943）は、その特徴に関して以下のように述べている。

> 拙著“外來語辭典”によってしらべると、イタリア語よりの外來語わ總數約 180 語で、そのうちイタリア語を語源としかつ原語とするもの、およびイタリア語のみを原語とするものが約 160 語である。イタリア語よりの外來語の大部分わ音樂用語であり、洋樂用語の外來語の大部分わイタリア語よりきてゐる。（荒川 1943:124）

荒川(1943)も、楳垣(1943)のように、イタリア語からの語彙と西洋音楽の分野との深い関係を強調している。『外來語概説』では荒川は 144 語のイタリア語由来の語彙リストを挙げて、音楽用語、その他の芸術用語、その他の三つに分けている。そのうち、音楽用語は 89 語(61.8%)にのぼり、その他の芸術用語は 19 語(13.2%)である。なお、その他の意味分野に属する単語は 36 語(25%)に相当する。

続いて、荒川はイタリア語由来の外来語の伝達ルートについて以下のように指摘している。

> しかしてこれらわまたおおくドイツ語、英語、フランス語、ポルトガル語などにももちいられてゐるから、一面原語わ多元的であり、もしそうゆう點からみれば明治の外來語一般と同様英語をおもくみるべきであろう。(荒川 1943:124)

次に、新村出は『外來語の話』(1944)でイタリア語から入った言葉について以下のように述べている。

> イタリアの藝術の影響が、明治の初年には相當著しかつたことについても、私の懐舊談は及びたいと思ふが、之は國語の上には何等の影響をも残さなかつたやうに見えるから、多くは語る必要はあるまい。絶無ではなかつたかも知れぬが、今日残つてるものは、他國語を經て入つたものが最多數であらう。オペラ、ピアノ等の言葉、その他洋樂界、洋畫界等の術語には、イタリア語があるやうであるが、直接よりも間接の傳來の方が遥かに多からう。(新村 1944:196)

新村(1944)も、楳垣(1943)や荒川(1943)と同様にイタリア語由来の語彙が他の言語を通じて日本に入ったと指摘し、明治期に芸術の分野においてイタリアの影響が大きかったが、日本語にはあったとしても残っていないと記述している。

後の外来語研究は、イタリア語由来の語彙にはほとんどふれていないが、1956 年に国立国語研究所が雑誌の語彙に関する大規模調査を行い、その結果を報告した 1964 年発行の『現代雑誌九十種の用語用字第 3 分冊：分析』には外来語の原語に関するデータが記載されている。

この調査によると、現代雑誌における外来語の異なり語数が総語数の 9.8%にのぼり、そのうち、イタリア語由来の外来語が 1.5%を占めている。また、イタリア語由来の外来語は、英語、フランス語、ドイツ語に続いて 4 位を占めており、比較的高い比率を示している。しかし、二つの点に注目すべきだと思われる。一つは、江戸時代以

前の日本語の語彙に影響を与えたオランダ語やポルトガル語よりイタリア語の異なり語数が多いが、延べ語数を見れば、全く異なった結果が得られる可能性が高いことである。これは、ポルトガル語やオランダ語からの外国語の多くが国語化した旧外来語で、その使用率が高いからである。もう一つは、国立国語研究所(1964)では原語とは直接借用の場合でも間接借用でも用いられ、そのデータがイタリア語の直接的な影響を表していないと考えられることである。

次に、矢崎源九郎は『日本の外来語』(1979)でイタリア語を原語とする「マドンナ」と「プリマ・ドンナ」について短く論じ、「プリ・マドンナ」が「(マドンナのように)美しい人」の意味で普及した「マドンナ」の影響で生じた誤った表記であると指摘している。また、両方が英語を通して日本語に入った可能性が高いと述べている。

最初にイタリア語由来の語彙を中心に本格的な研究を行ったのは、古浦敏生である。古浦は 1997 年に発表した論文「日本語におけるイタリア語からの借用語」で外来語・カタカナ語辞典 4 種を調査し、そこに記録されているイタリア語由来の外来語を抜き出し、詳細な用例リストを挙げている。古浦(1997)と次の節で取り上げる Calvetti(2003)の付録に基づき、借用時期が明治期であると考えられる語彙のリストを作成し、4.1 節に記載する。

調査資料から収集した用例に関しては、古浦(1997)はカタカナ表記、意味分野、借用時期、出典について詳しく記述し、分析を行っている。借用時期にもふれているが、主に共時的な視点から検討している。イタリア語由来の外来語の変遷に関わる古浦(1997)の調査結果を 3.3 節でより詳しく紹介する。

3.2 イタリアにおける先行研究

Calvetti は 2003 年に発表した Prestiti italiani nella lingua giapponese. Note sul contatto linguistico tra Italia e Giappone(日本語におけるイタリア語からの借用語—イタリア語と日本語との言語接触に関する一考察)で日本語におけるイタリア語由来の語彙を中心に論じている。Calvetti(2003)は、まず、イタリアと日本の文化交流史の概要を紹介し、明治 9 年(1876)に出版された曲木如長著の『佛伊和三國通語』がおそらく近代日本における初のイタリア語の語彙集であると指摘している。本研究の 4.2 節でこの貴重な文献をもう少し詳しく紹介し、そこに収録されている語彙について考察したい。

次に、Calvetti(2003)はあらかわそおべえ著『角川外来語辞典』第二版(1977)と堀内克明監修『カタカナ・外来語/略語辞典』第二版(2000)を調査した結果に基づき、イタリア語由来の外来語の特徴と変遷について考察している。明治期におけるイタリア語由来の語彙に関しては、

当時の日本で活躍したお雇い外国人の中でイタリア出身の専門家や芸術家もいたが、イタリア語ではなく、他のヨーロッパ言語で日本人とコミュニケーションを取っていたため、イタリア語からの直接借用が起こらなかった可能性が高いと指摘している。

Calvetti（2003）は、『角川外来語辞典』に収録されているイタリア語由来の外来語の大部分が音楽の分野に属していることに関して、ヨーロッパ言語をはじめ世界諸言語で見られる現象であり、つまりイタリア語由来の借用語が世界共通語で他の言語を通じて日本語に入った場合もあると強調している。[2] 例えば、イタリア語［falˈsetto］より英語［fɔːlˈsetəʊ］の方に近い「フォルセット」の例を挙げ、英語の発音の影響が明らかな場合もあると指摘している。また、イタリア語由来の借用語が 80 年代から急増し、直接イタリアから借用された可能性が高いと指摘している。これは、そのカタカナ表記がイタリア語の発音により忠実になってきたことによっても示され、表記にばらつきがある場合にも、イタリア語に近い方に変化する傾向が見られ、イタリア語の直接的な影響を表していると述べている。その例としては、terrazzo を原語とする語形が挙げられている。最初に現れた語形は英語［təˈræzəʊ］に近い「テラゾー」であるが、イタリア語[terˈrattso]に近い「テラゾ」や「テラツォ」も見られる。

また、二つの付録を付け、調査に用いたそれぞれの辞書におけるイタリア語由来の外来語のリストを挙げている。前節で述べたように、古浦（1997）と Calvetti（2003）の付録 1 に基づき、借用時期が明治期であると考えられるイタリア語由来の外来語のリストを作成し、その特徴や伝達ルートについて考察する。

Satoru Nagami と Alda Nannini は、Italianismi in giapponese, nipponismi in italiano（日本語におけるイタリア語由来の借用語、イタリア語 における日本語由来の借用語について）（2006）で日本語とイタリア語の言語接触の現象を両面から考察している。最初の接触から明治期までの日伊文化交流史を振り返ったあと、明治期から第二次世界大戦までにおけるイタリア語由来の外国語の音声学的分析を行い、その特徴や伝達ルートについて論じている。借用語の音声形成は、そのルートを探るための一つの大事な手がかりであり、4.3 節でこの視点から考察したい。

Nagami-Nannini（2006）は、明治時代に日本に入ったイタリア語由来の語彙が多くの場合、英語やフランス語を通して借用された可能性があると推定している。また、現代におけるイタリア語を原語と

[2] 『角川外来語辞典』においては、あらかわは原語多元説を立てて、同形の原語を併記している。

する外来語とイタリア語における日本語由来の借用語について徹底的に考察し、両国間の文化交流を言語の面から解明している。

3.3 イタリア語由来の外来語の変遷について—意味分野と借用時期を中心に

本章では、3.1 節と 3.2 節で紹介した古浦(1997)と Calvetti(2003)の調査結果を基に、量的な観点からイタリア語由来の外来語の意味分野の分布と借用時期を分析し、日本語におけるイタリア語由来の語彙の変遷について考察したい。

まず、古浦(1997)の調査結果に基づいて考察したい。古浦(1997)は外来語・カタカナ語辞典 4 種を調査し、イタリア語からの借用語の用例リストを作成している。調査に採用したのは、以下の文献である。

- 楳垣實編(1966)『外来語辞典』第 3 版、東京堂、収録語彙は約 15000 語。
- 吉沢典男・石綿敏雄著(1981)『外来語の語源』第 3 版、角川書店、収録語彙は約 6000 語。
- 三省堂編修所編(1994)『コンサイス・カタカナ語辞典』初版、三省堂、収録語彙は約 47000 語。
- 川本茂雄監修・飯田隆昭・山本慧一共編(1994)『日本語になった外国語辞典』第 3 版、集英社、収録語彙は 25000 余語。

調査結果によると、その 4 種の外来語辞典に収録されているイタリア語由来の見出し語の総数は 477 語である。

古浦(1997)はなぜこれらの辞書を選択したかについては説明していないが、坂田(1993)が指摘しているように、『外来語辞典』、三省堂編修所編(1987)『コンサイス外来語辞典』の成果を引き継いだ『コンサイス・カタカナ語辞典』及び『日本語になった外国語辞典』は、あらかわそおべえ著(1977)『角川外来語辞典』とともに、現在用いられている外国語辞典の中では最も標準的なものである。多くの辞書の土台となっており、基本的な外来語辞典であるため選ばれたと考えられる。一方、『外来語の語源』は外来語の語源を扱ったもので、特徴として見出し語に対応する訳語についても記述していることが挙げられる。他の資料と比べれば収録語彙は比較的に少ないが、本格的な辞書で、この研究の目的に合致した資料となっていたと思われる。その上、いずれも借用年代の記載があり、おそらくこれも選定基準の一つだったであろう。

古浦(1997)の調査結果によるイタリア語由来の借用語の意味分野の分布について考察しよう。以下の表は、意味分野別にみたイタリア語を原語とする外来語を示したものである。

［表 3-1］意味分野別にみたイタリア語由来の外来語（古浦 1997:66 の一部編集）

順位	意味分野	語彙数	%
1	音楽	302	63.3
2	料理・飲食店	57	11.9
3	美術	19	4
4	舞台・映画・劇場	15	3.1
5	建築	12	2.5
6	挨拶・掛け声	10	2.1
7	芸術一般	8	1.7
7	政治・経済・貿易	8	1.7
8	宗教	5	1
9	地質	4	0.8
10	植物	4	0.8
11	スポーツ・登山	3	0.6
12	言語・文学	3	0.6
13	服飾	2	0.4
14	その他	25	5.2
計		477	

［表 3-1］によると、音楽関連語彙が 302 種で用例全体の 63%を超え、圧倒的に多いことが明らかである。これは、イタリア語由来の外来語と音楽の分野との深い関係を示しており、荒川（1943）や楳垣（1943）など、過去の研究結果と一致している。次に、料理・飲食店関連の語彙が 57 種で 12%ほどを占め、音楽関連用語よりかなり少ないが、荒川（1943）の用例リストと比べれば、大幅に増えたことがわかる。3 位は美術用語が 19 種で占めているが、4%にとどまる。

また、古浦（1997）はイタリア語由来の語彙の借用時期についても検討している。以下の表は、借用時期別にみたイタリア語を原語とする外来語を示したものである。

［表 3-2］借用時期別にみたイタリア語由来の外来語（古浦 1997:38 の 一部編集）

借用時期	語数	%
明治	31	9.2
大正	110	32.5

昭和	73	21.6
現代	124	36.7
計	338	

伝来時期が明示されている語の数は、338 である。現代(第 2 次世界大戦終了から 1997 年に至るまで)の語が最も多く、124 語(36.7%)である。次いで、大正時代の語が 2 位で、110 語(32.5%)である。昭和時代(昭和元年から第 2 次世界大戦終了まで)の用例が 3 位で、73 語(21.6%)である。最後に、明治時代のものが 31 語(9.2%)である。ただし、338 語のうち、借用時期に関する記述が一定でない語は 70 語(14.7%)である。意味分野と借用語時期との関係について、用例リストのデータによれば、古浦(1997)は音楽用語が主として大正時代に、料理関連及び美術用語が主として現代に、舞台・映画・歌劇関連語は主として昭和時代に借用されたと指摘している。

次に、Calvetti(2003)の調査結果に基づいて考察しよう。Calvetti(2003)は、二つの付録を付け、調査に用いた 2 種の辞書におけるイタリア語由来の外来語のリストを挙げている。採用した辞書は、あらかわそおべえ著『角川外来語辞典』第二版(1977)と堀内克明監修『カタカナ・外来語/略語辞典』第二版(2000)である。前者を選んだのは、項目の出典も記載されており、近代日本語史を研究するには非常に便利であるからだと説明している。しかし、データが少し古くなっており、現代までの外来語の変遷を見るために、最近の辞書も調査することにしたとのことである。

付録 1 には、約 45000 語を収録している『角川外来語辞典』から抜き出した 287 項目が記載されている。付録 2 には、『カタカナ・外来語/略語辞典』における 243 項目が記録されている。以下の表は、この付録の項目を意味分野別に示し、二つの辞書を比較したものである。この二つの単語リストを比較し、イタリア語起源の借用語の変遷を検討したい。

［表 3-3］意味分野別にみたイタリア語由来の外来語(Calvetti(2003)の付録 1 に基づく)

意味分野	角川外来語辞典		カタカナ・外来語/略語辞典	
	語彙数	%	語彙数	%
音楽	149	56.2	83	34.2
料理	26	9.8	64	26.3
美術	25	9.4	19	7.8

政治・経済	13	4.9	3	1.2
風俗	8	3	7	2.9
建築	7	2.7	8	3.3
舞踏・映画・劇場	6	2.3	9	3.7
歴史	6	2.3	2	0.8
ファッション・宝飾	3	1.1	10	4.1
貿易・商業	3	1.1	6	2.5
自動車	2	0.8	9	3.7
その他	17	6.4	23	9.5
計	265		243	

［表 3-3］によれば、音楽用語が最も多いものであり、『外来語辞典』では 149 語で約 56%にのぼり、上述の研究に近い比率となっている。しかし、これに比べて、『カタカナ・外来語/略語辞典』では 34%と低い数字となっている。原因は、後者が多岐に渡る分野の新語・流行語など『現代用語の基礎知識』に基づき、古い専門用語より最新語彙・流通語を記録する傾向が見られ、その編集基準にあると考えられる。

一方、料理をはじめ、ファッションや自動車関連のものが増加している。Calvetti（2003）は、これが近年の日本におけるイタリアのイメージを語り、特にイタリア料理の最近の人気を示していると述べている。

Calvetti（2003）の付録 1 に項目の出典の記載がある。次に、この Calvetti（2003）の付録 1 の、イタリア語由来の外来語の伝来時期について考察したい。以下の表は、借用時期別にみたイタリア語由来の項目を示したものである。

［表 3-4］借用時期別にみたイタリア語由来の外来語（Calvetti（2003）の付録 1 に基づく）

借用時期	語数	%
江戸	8	3.9
明治	49	23.9

大正	37	18.5
昭和	15	7.3
現代	95	46.4
計	204	

出典が記載されている語の数は、204 である。現代(第 2 次世界大戦終了から 1997 年に至るまで)の語が最も多く、95 語(46.4%)である。これは、古浦(1997)の調査結果に近い結果となっている。しかし、明治期の語は 49 語(23.9%)と 2 番目に多く、古浦(1997)と比べて比較的に高い数字を示している。

4. 明治期におけるイタリア語由来の外来語——そのルートを中心に

前章で上述したように、先行研究ではイタリア語を原語とする語彙の多くがおそらく他の言語を通じて日本語に導入された、と意見が一致している。また、外来語辞典や国語辞書を調べてみると、イタリア語由来の外来語はイタリア語を原語とする場合も他の言語を原語とする場合もある。そこで、本章では明治期におけるイタリア語由来の外来語の伝達ルートを中心に考察し、イタリア語が日本語語彙にどれほど直接に影響したかを明らかにしたい。

研究対象に明治期を選んだ理由は、2 章で述べたようにイタリア語由来の語彙が日本語に導入されはじめたのが明治期だからである。この時期には日本とイタリアとの文化交流が見られ、直接イタリア語から日本語に入った事例もあるという可能性がないわけではない。したがって、いつからイタリア語の直接的な影響が現れたかを解明するには、明治時代までさかのぼる必要がある。特に、これによって、音楽用語や美術用語の成立にイタリア語が果たした役割を位置づけられるであろう。前章で明らかになったように、イタリア語由来の借用語全体を検討した研究がいくつかあるものの、明治期を徹底的に調査した研究はまだ見られない。そこで、この時代を取り上げ、考察を試みることにした。

4. 1 明治期におけるイタリア語由来の外来語のリスト

まず、調査対象となるイタリア語由来の語彙を定める必要がある。そのために、古浦(1997)の用例リストと Calvetti(2003)の付録 1 を基に借用時期が明治時代であると考えられる語彙のリストを作成することにした。[3]この二つのリストを参考に選んだのには、二つの理由

[3] Calvetti（2003）の付録 1 に固有名詞（人名・地名）が含まれているが、省略した。

がある。一つは、古浦(1997)の用例リストには借用時期が表示されており、また、『角川外来語辞典』に基づいた Calvetti(2003)のリストには出典年が記載され、調査の目的に適うからである。もう一つは、この二つのリストが合わせて 5 種の本格的な外来語辞典を検討したもので、現代日本語においてまだ使用されている事例をほぼ完全に収録していると考えられるからである。

以下の表は、イタリア語由来の外来語の原語、日本語における語形とその意味分野を原語のアルファベット順にまとめたものである。[4]

［表 4-1］明治期におけるイタリア語由来の外来語のリスト

原語	日本語	意味分野
affresco	アフレスコ	美術
agitato	アジタート	音楽
arietta	アリエッタ	音楽
allegro ma non troppo	アレグロ・マ・ノン・トロッポ	音楽
banco	バンコ	経済
basso	バソ	音楽
broccoli	ブロッコリ プロッコリ ブロコリー ブロッコリー 木立花椰菜	料理
campanile	カンパニレ	建築
cantata	カンタータ	音楽
casino	カジノ	その他
casula	カズラ	宗教
cembalo	チェンバロ	音楽
chiaroscuro	キアロスクロ キアロスクーロ	美術
clavicordo	クラビコード	音楽

[4] 古浦（1997）と Calvetti（2003）のリストに記述されている借用時期が一致していない場合、基準として最も古いものにを参照した。また、別の語形が『日本大国語辞典』に見出し語として収録されている場合、それも挙げることにした。

	クラヴィコード	
clavicembalo	クラビチェンバロ	音楽
coda	コーダ コダ	音楽・舞踏
concerto	コンチェルト	音楽
crescendo	クレシェンド クレッシェンド クレセンド クレッセンド	音楽
da capo	ダカーポ ダ・カーポ ダー・カーポー	音楽
decrescendo	デクレシェンド デクレッシェンド	音楽
diminuendo	デミヌエンド ディミヌエンド	音楽
do	ド	音楽
do re mi fa	ドレミファ ド・レ・ミ・ファ	音楽
duomo	ドゥオモ	建築
fa	ファ	音楽
fagotto	ファゴット	音楽
forte	フォルテ	音楽

fortissimo	フォルティシモ フォルティッシモ	音楽
fresco	フレスコ	美術
fuga	フーガ	音楽
glissando	グリサンドー グリッサンド	音楽
gondola	ゴンドラ	その他
intermezzo	インテルメッツォ	音楽
la	ラ	音楽
lamento	ラメント	音楽
larghetto	ラルゲット	音楽
largo	ラルゴ	音楽
libretto	リブレット	音楽
liuto	リュート	音楽
macaroni	マカロニ	料理
madonna	マドンナ	美術・宗教
manifesto	マニフェスト	政治
maraschino	マラスキー マラスキーノ マラスキーノー	料理
marsala	マルサラ	料理
mezzo soprano	メゾ・ソプラノ メツォソプラノ メッゾソプラノ	音楽
mezzotinto	メゾチント メゾティント メッゾチント	美術
melodia	メロヂア	音楽
moderato	モデラート	音楽
mo(t)tetto	モテット	音楽
mi	ミ	音楽

non troppo	ノントロッポ ノン・トロッポ	音楽
oboe	オーボエ オーボー	音楽
oboe d'amore	オーボエ・ダモーレ	音楽
opera	オペラ	音楽
operetta	オペレッタ	音楽
palazzo	パラッツォ	建築
pianoforte	ピアノフォルテ	音楽
piazza	ピアッツァ	建築
pietà	ピエタ	美術・宗教
pizzicato	ピチカート ピッチカート	音楽
presto	プレスト	音楽
re	レ	音楽
secco	セッコ	美術
sinfonia	シンフォニア	音楽
sol	ソ	音楽
sonata	ソナタ	音楽
sonetto	ソネット	文学
soprano	ソプラノ	音楽
spaghetti	スパゲッチ スパゲッティ スパゲチ スパゲティ	料理
staccato	スタッカート スタッカット	音楽
stucco	スツッコ	建築
tenore	テノール	音楽
terra cotta	テラコッタ	美術・建築

	テラ・コッタ テルラコタ	
toccata	トッカータ	音楽
viola	ビオラ ヴィオラ	音楽
violoncello	(ビオロン)チェロ ビオロンセロ	音楽
vulcano	ブルカノ	地質

［表 4-1］には 77 語の見出し語が収録されている。意味分野に関し ては、音楽用語が大部分を占めており、52 語で約 67%を上回っているが、これは先行研究によるイタリア語由来の語彙全体における音楽用語の比率に近い結果となっている。音楽用語では、「クレシェンド」「フォルテ」「グリッサンド」「プレスト」のような演奏標語、「オーボエ」「ピアノフォルテ」「ビオラ」「チェロ」などのような楽器名、「コンチェルト」「フーガ」「シンフォニア」「ソナタ」のような楽式、「リブレット」「オペラ」「オペレッタ」「ソプラノ」のようなオペラ関連の用語などが見られる。次に、「キアロスクロ」「フレスコ」「メゾチント」「テラコッタ」といった美術用語が 8 語で約 10%を占め、第 3 位に「カンパニレ」「ドゥオモ」「スツッコ」のような建築用語があり、5 語で 6.5%に相当している。また、「ブロッコリ」「マカロニ」「スパゲッティ」といった料理関連の語彙が建築用語と同じ比率を占めている。この数字は、現代のイタリア語由来の外来語を考えると、非常に低い数値となっている。

4.2『佛伊和三國通語』について

この節では、曲木如長(1858-1913)の編集による『佛伊和三國通語』について考察したい。これは、明治 9 年(1876)に績文社で出版され、3.2 節で述べたように、初めてイタリア語を収録した辞書とされている。そして、これは日伊文化交流史やイタリア語教育史において大きな意義を持つものである。しかし、Calvetti(2003)はこの文献について短くふれているものの、他の先行研究で詳細に研究したものはない。そこで、本稿で取り上げることにした。『佛伊和三國通語』に記録されている外来語を検討し、イタリア語由来のものが収録されているかどうかを明らかにしたい。

曲木如長という人物は、司法省参事官などを務めた法律家で、明治 9 年(1876)にヨーロッパに留学し、フランスとイタリアで法律を研究した。また、森(1980)によると、法律顧問のパテルノストロの司法省での通訳を務め、「伊学協会」の設立にも貢献した。さらには、1848 年にサルデーニャの国王カルロ・アルベルトによって制定されたイタリア王国の憲法、いわゆるアルベルト憲法に含まれている刑法などをイタリア語から翻訳し、『伊太利刑法』と『伊国裁判所構成法』の邦題で明治 23 年(1890)に出版し、初めてイタリアの法律制度を日本に紹介した。つまり、曲木はイタリアと縁が深く、イタリア語の知識が十分にあったと考えられる。

『佛伊和三國通語』には約 2500 語が記録され、フランス語、イタリア語、日本語、ローマ字が左から右へ縦にフランス語のアルファベット順に並べられている。収録語彙は、意味分野によって細かく分類され、数字をはじめ、自然現象、植物や動物、飲食物日常生活に必要な言葉、様々な専門用語などが取り上げられている。そのほとんどは名詞、あるいは名詞句であり、名詞には冠詞(定冠詞または不定冠詞、イタリア語の場合冠詞が抜けているものもある)がついている。数は少ないが形容詞と動詞もある。3 ヶ国語の項目を見てみると、間違いは少なく、丁寧に編集されていることがわかる。

特徴としては、フランスやイタリア固有のものにも日本の概念が当てはめられて訳されている場合が多く、外来語が比較的少ないことが挙げられる。しかし、これは明治期の辞書に見られる傾向で、明治初年の『佛伊和三國通語』も例外ではない。また、ローマ字表記には揺れがあり、フランス語の表記の影響が明らかである。以下の表は、記録されている外来語(混種語を含む)のリストである。

［表 4-2］『佛伊和三國通語』における外来語のリスト

フランス語	イタリア語	日本語	ローマ字
Le Christ	Cristo	耶蘇	Yaso
Un Gaz	Un gas	瓦斯	Gas
L’ammoniaque	L’ammoniaco	諳母尼亜	Ammonia
Le verre	Il vetro	硝子	Biidoro
Un grosseiller	Una pianta d’uxa spina	リベスノ木	Ribés no ki
Une grosseille	Ribes	リベス	Ribés
Le safran	Zafferano	泊夫藍	Safran
Le tabac	Tabacco	煙草	Tabaco
L’alcool	L’alcool	火 酒	Alcool
La gomme arabique	La gamma arabica	亜剌比亜護謨	Arabiyagomou

La gomme élastique	La gomma elastica	護謨	Gomou
Des bretelles	Delle bretelle	ゾボン釣り	Zoubon-tsouri
Un pantalon	Un pais di calzoni	袴	Hakama, zoubon
Un bouton	Un bottone	扣鈕	Botan
Du savon	Del sapone	石磯	Siabon
De la flanelle	Della flanella	フラネル	Flanelle
Du velour	Del velluto	天鵞絨	Birodo
Un café	Un café	珈琲店	Koufi-misé
Un carreau de vitre	Una lastra divetro	硝子板	Biidoro-ita
Du pain	Del pane	麺包	Pan
Du pain blanc	Del pane bianco	白麺包	Siro-pan
Du pain bis	Del pane bigio	麥麩麺包	Fousouma-pan
Un bifteck	Un biftek	ビフテキ	Bifteki
Une tasse de café	Una tazza di caffè	珈琲一杯	Cofi ippaï
Un petit verre de Cognac	Un bicchierino di Cognac	罷蘭地一杯	Brandi ippai
Des cigares	Dei sigari	巻煙草	Maki-tabako
Des cigarettes	Dei sigaretti	紙巻煙草	Kamimaki tabako
Le café	Il caffè	珈琲	Cofi
Le chaocolat	Il cioccolatte	知古辣	Tsiokorete
Du punch	Del punce	ポンス	Ponce
Du champagne	Della Sciampagna	三鞭酒	Sampan-siu
Une cafetière	Una caffettiera	珈琲瓶	Cofi-bin
Un verre	Un bicchiere	玻璃碗	Coppou
Un moulin à café	Un mulinello	珈琲磨	Kôfi-ousou
Les glaces	I cristalli	玻璃	Garas
Les ressort	Le molle	バネ	Bané
Un boulanger	Un fornaio	麺包屋	Pan-ya
Un cafetier	Un caffettiere	珈琲屋	Cōfi-ya
Un vitrier	Un vetraio	硝子匠	Biidoro-ya
Une plume	Una penna	筆（ペン）	Foudé
Une plume d'oie	Una penna d'oca	鵝筆	Ga-pen
Un piano	Un pianoforte	ピヤノー	Piano
Un balancoir	Un'altalena	ブランコ	Branco

イタリア語を原語とする音訳語が一つ見られる。それは、フランス語 Un piano、イタリア語 Un pianoforte に相当する「ピヤノー」で

ある。この語は、英語 piano を通じて導入されたものとされており、現代日本語で「ピアノ」として定着した。明治期以前にすでに現れ、『角川外来語辞典』によると、早くも 1860 年に、福沢諭吉著の『華英通語』などに見られる。音楽用語においては、「ピヤノー」は唯一の音訳語の事例である。

次に、明治期に日本語に入ったイタリア語の日本語訳について考察したい。音楽用語には 22 語の見出し語が記録され、主に楽器名である。そのうち明治期に日本語に入ったイタリア語とされる項目は、一つ見られた。これも楽器の名前であり、Una viola（現代日本語で「ビオラ」）である。Una viola は、フランス語で Un alto として記録され、日本語で外来語が使われておらず、日本の伝統的な擦弦楽器の一つ、「鼓弓」として日本語に訳されている。また、もう一つ おもしろい例として「音曲會」を挙げたい。このフランス語訳は Un concert で、日本語の意味と相当しているのに対し、イタリア語訳は Un’accademia di musica で、日本語とフランス語の意味と離れている。実際は、Un’accademia di musica というのはイタリア語で「音楽学校」 という意味で、musica は「音楽」、accademia は「学校、会」を示し、di は前置詞で所有を表している。フランス語の concert や日本語の音楽会の正しいイタリア語訳は concerto である。つまり、accademia di musica はフランス語からは翻訳されておらず、日本語の「音楽」と「会」の直訳であると考えられる。イタリア語 Un concerto は、遊びの 中に記載され、日本語訳は「合奏」である。ちなみに、イタリア語 の concerto は、「協奏曲」という狭義で明治期に「コンチェルト」として日本語に導入されたが、ここにはそれが記録されていない。

食物と飲み物のカテゴリーには、合わせて 122 項目が記載され、他の分野と比較すると外来語がかなり多い。例えば、ポルトガル語由来の「麺包」やオランダ語由来の「珈琲」のような当て字外来語がある。一方、カタカナ語の例としてフランス語 bifteck 由来の「ビフテキ Bifteki」が挙げられる。この語のイタリア語訳はフランス語からの外来語 Un biftek となっているが、この言葉は現代イタリア語で使われて おらず、フランス語 bifteck の語源でもある英語 beefsteak から来ている bistecca が使用されている。イタリア語由来の言葉については、明治期に「マカロニ」として日本語に入った Dei maccheroni、フランス語 Du macaroni が記録されているが、日本語訳は「温飩」となっている。 「イタリア風マカロニ」という意味であるフランス語 Du macaroni à l’italienne といった表現も記録されているが、イタリア語は Dei maccheroni all’italiana という直訳になっており、日本語は「伊太利亜製温飩」として訳されている。明治期に日本語に入ったもう一つのイタリアの名

物「スパゲッティ」は記載されていないが、スパゲッティに似た麺類、Dei vermicelli、フランス語で Des vermicelles も、日本の食物 に当てはめられて「素麺」と訳されている。

貨幣の節には、フランスの通貨(仏 Un franc、伊 Un franco、日「フランク」)やイギリスの通貨(仏 Une livre sterling、伊 Una lira sterlina、日「ポウンド」)が記録されているが、イタリアの貨幣 lira は、明治期に「リラ」として日本語に入ったとされているものの、意外なことに記載されていない。[5]

4.3 明治期のイタリア語由来の外来語の表記について

［表 4-1］に収録されている原語は、イタリア語から、英語をはじめドイツ語、フランス語などに借用されたものである。無論音声的な変化の現象が生じる場合もあるが、表記の面から見れば同形が多く、特に英語やドイツ語の場合、イタリア語の表記はそのまま取り入れられて、音声的な変化は表記に反映されていない。借用語が日本語表記に転写される際、伝達言語に音声的な変化が現れた場合、Calvetti（2003）も論じているように、その変化した音声形式を反映する表記が伝達ルートの手がかりになることもある。

本節では、明治期におけるイタリア語からの借用語の音声学的分析を行い、イタリア語の音声的特徴を日本語ではどのように表記しているかについて考え、その伝達方法やルートを探るための手がかりになるものについて考察したい。

イタリア語においては母音の長短は意味上の弁別的な機能を持っておらず、表記上の区別がないが、アクセントを持つ開音節の母音は長く発音されるため、カタカナで示される場合、長母音として表記されるのが普通である。一方、閉音節の母音はアクセントを持っていても短く発音されるので、短母音として扱われている。古浦(1997)は、借用語としてのカタカナ日本語においては、イタリア語の第 2 尾音節アクセント語や第 3 尾音節アクセント語におけるアクセントを有する開音節の長母音は、長母音を含む音節として扱われる傾向が見られる、と指摘している。彼は、イタリア語からの借用語とされる 190 語の長母音の扱いを分析した結果、そのうち約 62%を占める 117 例が上述のルールに当てはまると述べている。また、Nagami-Nannini(2006)が指摘しているとおり、母音の長短がアルファベット表記で表されていないため、アクセントを持つ開音節の母音が長母音として表記されていない単語が書き言葉を通じて借用されたと考えられる。明治期におけるイタリア語からの借用語を分析し

[5] 曲木訳の『伊国裁判所構成法』（1890）に「リーラ」が見られる。

た結果、語末音節アクセント語を除き、開音節の母音が長母音として表記されていない例は以下のとおりである。

［表 4-3］開音節の母音が長母音として表記されていない例

イタリア語	日本語	イタリア語	日本語
campanìle	カンパニレ	mezzosopràno	メツォソプラノ
casìno	カジノ	melodìa	メロヂア
càsula	カズラ	òpera	オペラ
chiaroscùro	キアロスクロ	sinfonìa	シンフォニア
còda	コダ	sonàta	ソナタ
duòmo	ドゥオモ	sopràno	ソプラノ
marsàla	マルサラ	vulcàno	ブルカノ

したがって、［表 4-3］の例は書き言葉を通じて導入された可能性が高いと思われる。つまり、直接イタリア語からではなく、イタリア語の表記をそのまま取り入れた言語を通して導入された可能性も考えられる。しかし、外来語の表記は時代によって変化し、Calvetti (2003) が指摘しているように、現代イタリア語由来の外来語はより正確にイタリア語の発音を表す傾向にある。記述の母音の長短の点に関しては、「コダ」に対して「コーダ」、「キアロスクロ」に対して「キアロスクーロ」が見られるようになったことが挙げられる。これはイタリア語由来の語彙のイタリア語に近い方に変化する傾向を裏付け、現代日本語におけるイタリア語の直接的な影響を表していると考えられる。ただし、外来語が原語の発音に近づいていく傾向はイタリア語由来の外来語に限られた現象ではなく、他の言語由来の外来語にも見られる傾向である。

また、イタリア語においては二重子音と単子音との対立があり、二重子音は同じ子音を二つ合わせて示されている。日本語では二重子音は、「ン＋単子音」として表記されている鼻子音を除き、「促音＋単子音」として表されている。例えば、basso「バソ」のような二重子音が表記されていない場合、直接イタリア語からではなく、発音上は二重子音が単子音に変化した言語を通じて日本語に入ったと考えられる。basso は、英語に借用され、［ˈbæsəʊ］と発音されていることからすれば、おそらく英語から日本語に取り入れられたであろう。同じような例がいくつかあるが、これもイタリア語の発音に近づく傾向が見られる。以下の表は、二重子音を表すようになった例をまとめたものである。

［表 4-4］二重子音に関する表記変化

原語	旧語形	新語形
decrescendo	デクレシェンド	デクレッシェンド
fortissimo	フォルティシモ	フォルティッシモ
glissando	グリサンドー	グリッサンド
pizzicato	ピチカート	ピッチカート
spaghetti	スパゲチ	スパゲッチ
	スパゲティ	スパゲッティ
terra cotta	テルラコタ	テラ・コッタ

Nagami-Nannini（2006）は、最近「キャンティ」と表記される傾向にある chianti「キアンティ」の例を挙げて、イタリア語の上昇二重母音の表し方も伝達方法の手がかりになると指摘している。ia,ie,io,iu と記される音は、i がアクセントを持たない場合、上昇二重母音と言い、「半母音（硬口蓋接近音[j]）＋母音」として発音されるのが常である。こういった二重母音を含んだ「子音＋半母音＋母音」音節がカタカナ表記で表される場合は、拗音または非拗音を使い、上昇二重母音をつづることができる。しかし、イタリア語由来の語彙全体を見ると、chianti の ia のような上昇二重母音はカタカナ表記で非拗音を使って表すことが一般的であり、また「外来語の表記」（1991）において次のように定められている。

> イ列・エ列の音の次のアの音に当たるものは，原則として「ア」と書く。［…］注 1 「ヤ」と書く慣用のある場合は，それによる。

逆に、5.3 節で分析する「キアロスクロ」は、最初に「キャロスクロ」として現れた。つまり、上昇二重母音の表記の仕方にばらつきが見られても、伝達方法の手がかりにすることは難しいと思われる。

4. 4. 明治期のイタリア語由来の外来語の伝達ルートについての一考察

音楽用語に関しては、イタリア語の影響は多くの言語に共通する現象である。［表 4-1］に収録されている音楽用語のすべては、イタリア語から英語に借用され、またドイツ語、フランス語などにも導入された場合が多い。西洋の音楽が日本に積極的に導入されはじめたのは明治前期であり、他の分野と同様に、近代西洋音楽用語の成立に英語が与えた影響は極めて大きい。それ以前に、蘭学者たちによるいくつかの研究が残っているが、彼らの考案した訳語は現在使われている用語との接点がほとんどなく、近代用語の創出への影響

が非常に少ない。フランス語やドイツ語からの影響があった可能性もあるが、イタリア語に関しては交流が少なく、ほとんどなかった。したがって、イタリア語由来の音楽用語は、直接イタリア語からではなく、他のヨーロッパ言語、特に英語を通じて日本語に入ったと考えられる。イタリア語由来の用語は、当時すでに英語の資料から訳された初の音楽入門書などに見られる。例えば、明治 16 年(1883)に文部省から出版された、瀧村小太郎訳の『音楽問答』を調査してみると、カタカナで表記されているイタリア語由来の演奏標語などが多く記載されており、［表 4-1］に収録されている項目の大部分がすでに現れている。

伝達言語において音声的な変化が生じたことから、他の言語を通じて日本語に導入されたことが明らかな単語もある。例えば、「テノール」はイタリア語 tenore に由来しているが、直接イタリア語から借用されたとすれば、「テノーレ」になっていたはずである。tenore は英語、ドイツ語、フランス語に借用された際、音声形式も表記も変化し、tenor として定着した。「テノール」は、おそらくドイツ語を通じて導入されたであろう。他のオペラ関連の用語、「オペラ」については第 5.1 節で考察したい。

一方、イタリア語 oboe に由来する「オーボエ」の場合は、発音が原語に近いにもかかわらず、その歴史を探ってみれば他の言語を通じて日本語に入ったことがわかる。oboe は、フランス語 hautbois からの借用語で、英語では両言語からの借用語が見られる。『日本語大国語辞典』によると、イタリア語に由来する英語からの「ヲボウ」が『西国立志編』(1870-71)に現れ、フランス語からの「オーボワー」が 1905 年に風俗画報に見られるのに対し、「オーボエ」は 1942 年に『夢声戦争日記』に現れる。前節で述べたように、イタリア語の発音に近づく傾向が見られ、このよう事例の場合、他の言語を通じて借用されたが、現代の語形の定着にイタリア語の直接的な影響があったと考えられる。

5. いくつかの語彙に関する語誌的考察

この章では、4 つの個別語について考察する。外来語のルートを正確に探るには、その語史を明らかにする必要があると思われる。ここで取り上げる単語は、音楽用語の「オペラ」、美術用語の「マドンナ」と「キアロスクロ」、料理用語の「マカロニ」である。音楽、美術・建築、料理はイタリア語の影響が最も顕著な分野であり、各分野から代表的な言葉を選んだ。

「オペラ」はイタリアが世界に誇るものであり、その原語であるイタリア語の opera は多くの言語に借用された言葉である。音楽用語

におけるイタリア語の影響は多数の言語に見られる現象であり、特にオペラ用語にはイタリア語からの外来語の役割は無視できないほど重要なものである。「オペラ」は正にその影響を代表する単語であると思われる。

「マドンナ」と「キアロスクロ」は、両方が美術用語であるが、この二つの例を選んだ理由は次のとおりである。「キアロスクロ」は、美術用語、狭義に言えば絵画用語であり、意味の縮小が見られる多くの外来語の一つである。これに対して、「マドンナ」は一般化した数少ない例の一つであり、この逆のケースを取り上げて、ルートとの関係を考察したい。また、両方が訳語と共存している点もおもしろい。

明治期における料理関連の借用語は、現代と比べれば少ないが、すでにいくつかの代表的なものが見られる。「マカロニ」は、イタリアの名物料理の一つであり、イタリアの国境を越えてヨーロッパをはじめ、世界中で食べられるようになった食べ物である。形式からすれば、他の言語を通じて日本語に入った可能性が非常に高いと思われるが、その歴史をさかのぼることによって正確な伝達ルートが把握できるであろう。

5.1「オペラ」について

「オペラ」は、opera という単語の音訳語である。opera とは、イタリア語で「仕事」「作品」を意味し、原来ラテン語 opus「労働」「仕事」の中性複数形 opera、または同形の女性単数形 opera「仕事」に由来するとされている。16 世紀末のイタリアで生まれた、音楽と演劇を融合した新たな舞台芸術を示すようになり、音楽用語としての意味でヨーロッパ諸国に普及し、英語をはじめ、フランス語、ドイツ語など、多くの言語に借用された。この意味で日本語にも導入され、外来語「オペラ」として定着した。例えば『日本大国語辞典』によると、「オペラ」はイタリア語 opera に由来し、意味は「音楽的要素に、舞台美術、演技、バレエなどを合わせた総合芸術」となっている。その訳語として「歌劇」と記載されている。

外来語辞典を調査した古浦(1997)によると、音楽用語 opera の借用語としての「オペラ」が明治期から見られるが、「オペラ」という語について考察すると、日本でのオペラの歴史をたどる必要がある。明治初期から西洋音楽を取り入れようという動きが始まったが、オペラはまだ知られていなかった。明治 8 年(1875)に有名な二人のソプラノ歌手、パルミエリ(Maria Palmieri)とレオノーヴァ(Dar'ya M. Leonova)が日本を訪れ、コンサートを開いた。曲目はオペラの曲を

含んでいたが、公演は独唱会となっていたため、西洋の音楽としか認識されていなかった。

翌年、初めて来日したオペラ団となるロネイ・セファス喜歌劇団(L'Aunay-Cephas Buffo Opera Company)がオッフェンバック(Jacques Offenbach)の喜歌劇「ペリコール」(La Perichole)など、いくつかのオペレッタを上演した。しかし、日本人の聴衆はほとんどいなかった。また、英語の新聞の広告を見ると、曲目が Buffo Opera や Comic Opera と表現されているのに対し、公演を報じた日本語新聞には「オペラ」や「歌劇」のような翻訳語は使われていない。東京曙新聞六月十四日付には「各国公使をはじめ他に外国人七十名ほど集会して仏国の音楽にて彼国の手踊二巻を催され」と記録され、オペラは「手踊」と表現されている。オペラの概念を全く理解していなかったことがわかる。

明治 12 年(1879)に、ヴァーノン歌劇団(Mr. Vernon's Royal English Opera Company)が当時東京の代表的な劇場であった新富座への出演を果たし、日本人向けにオペラ、オペレッタの一部などを上演したものの、日本側の記録はその歌劇団の名を「ヴァーノン一座」と呼ぶほか、彼らが演じたものを「西洋演劇」と示し、オペラと結びつく表現はまだ現れていない。

『日本大国語辞典』と『角川外来語辞典』によると、明治 14 年(1881)、「オペラ」というカタカナ語が日本の文献にようやく現れる。成島柳北著『航西日乗』(1881-1884)にある「ブーセイ同行諸子を招き『オペラ』の演劇を観せしむ」という一文である。しかし、ここでは柳北が自分の海外での洋楽体験をただ紹介しているだけで、言うまでもなく、当時この言葉がすでに日本語で実際に使われていたことにはならない。つまり、「オペラ」は外来語ではなく、まだ外国語であったと考えられる。

「オペラ」の現在の訳語である「歌劇」もまだ定着していなかった。朱(2003)によると、明治 18 年(1885)6 月の『大日本教育会雑誌』に音楽取調所の主催による「音楽演習会」の記事が載っており、いくつかの西洋音楽用語について説明されている。その中で「ヲペラ」という語形で opera に相当する音訳語が現れ、オペラに関する記述がある。ここには「『ヲペラ』ハ戯曲ト訳ス」があり、「オペラ」意訳語が「戯曲」とされている。「戯曲」という漢語は、宣教師が編集した英華字典で opera の翻訳として、早くも 1820 年代から用いられている。R. Morrison 著 *A Dictionary of the Chinese Language*(1815-1823)、W. H. Medhurst 著 *Chinese and English Dictionary*(1847)、W. Lobscheid 著 *English and Chinese Dictionary*(1866-1869)、J. Doolittle 著 *A Vocabulary and Hand-book of*

the Chinese Language(1872)の英華字典に記録されているのである。このような字典の影響を受けて、日本でも「戯曲」が opera の訳語として使われはじめたと考えられる。

一方、同時期の英和辞典を見てみると、様々な opera の訳語が現れている。日本最初の英和辞典である本木正栄等編『諳厄利亜語林大成』(1814)に「歌謡の劇場」があり、英語の opera の拡張意味である「オペラ劇場」の意味で訳されている。また、堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』(1862)、柴田昌吉・子安峻編『附音挿図：英和字彙』(1873)、島田豊編『附音挿図：和訳英字彙』(1888)のような幕末・明治前期の日本人によって編集された英和辞典に opera の翻訳として「演劇」が掲載されている。上述したように、英語以外にもイタリア語由来の opera は多くのヨーロッパ言語に借用されている。仏和や独和辞典を見てみると、村上英俊編『仏語明要』(1864)に「歌の遊」と「芝居」があり、薩摩学生編『官許独和辞典』(1873)に「浄瑠璃の類」がある。このことから、当時の日本では「オペラ」の音楽の形式の一つとしての理解がまだ非常に薄かったことがわかる。

朱(2003)が指摘するように、明治 20 年代後半になると西洋音楽の知識の普及とともに現代用語でもある音楽形式に関する漢語が見られるようになった。その一つは、「歌劇」である。しかし、明治 27 年(1894)に東京音楽学校の奏楽堂でグノー作曲の「ファウスト」の第一幕が上演された。この公演は日本のオペラの原点と言われるほど大成功を収めたが、それを報じた「帝国文学」の記事を見ると、その公演を指すのは「歌劇」ではなく、「楽劇」が用いられている。そのことから、まだ「歌劇」という言葉は浸透していなかったと思われる。また、「バリトオン」や「テノル」などのようカタカナ語の音楽用語が使われているものの、「オペラ」という音訳語は見られない。しかし、同年の、イタリア人歌手のブラチャリーニの上演を報じる記事などに現れる。

明治 20 年頃からドイツの理想主義が輸入され、明治中期に日本文化全体へのドイツ文化の影響が拡大し、洋楽界がドイツから受けた影響も多大なものであった。ドイツに留学した知識人は、ドイツの作曲家ワーグナーに関心を持ち、オペラに対する関心を高め、オペラを研究しはじめた。明治 35 年(1902)、東京音楽学校の「オペラ研究会」と東京帝大の「ワグネル会」が中心となって「歌劇研究会」が結成され、翌年、東京音楽学校で日本人の手による最初のオペラ上演となるグルックの「オルフェウス」を上演した。「美術新報」では「おぺら　歌劇オルフォイスの演奏」という見出しで、「オルフェウス」上演について報じている。また、同年に石倉小三郎が

「帝国文学」に発表した「歌劇オルフォイス」論文の中で、opera の訳語として「歌劇」が使われている。明治中期には、オペラに関する知識が高まり、音訳「オペラ」も用いられるようになった。

明治 43 年(1910)に出版された吉田恒三編『音楽辭書』に opera や opera から派生した表現が記録されている。イタリア語とされている opera(オペラ)、opera buffe(オペラ ブッフェ)、operetta(オペレッタ)があり、comic opera などのように、英語由来とされている見出し語もある。また、イタリア語由来のドイツ語 oper(オーペル)と operette(オペレッテ)があることから、当時、ドイツ語の影響がいかに大きかったかがわかる。解説に「歌劇」「滑稽的歌劇」「純歌劇」などが使われており、この頃、意訳語「歌劇」はすでに定着していたと思われる。

森鴎外著『かのように』(1912)では「或る同族の若殿に案内せられてオペラを見に行った」があり、「オペラ」という音訳語は見られるが、それに意訳語は添えられていない。明治期末から昭和初期までに「オペラ」が定着したと思われる。

また、例えば、夏目漱石著『明暗』(1916)の「百合子はすぐ自分の手に持った此方のオペラグラスを眼へ宛てがった」や、泉鏡花著『売色鴨南蛮』(1920)の「膝に置いた手に萌黄色のオペラバッグを大事そうに持っている」から、「オペラグラス」や「オペラバッグ」など、「オペラ」に関連する外来語が導入され、普及したことが読み取れる。

大正 2 年(1913)に宝塚歌劇の前身である宝塚唱歌隊が結成され、そして大正 6 年(1917)に帝国劇場洋劇部を継いだ浅草オペラが結成される。この二つの歌劇団は、日本のオペラの発展に大きな影響を与えた。例を挙げると、桃井鶴夫編『アルス新語辞典』(1930)に「Opera(英)楽劇。音楽と歌舞とを同様に混用する劇の一種。帝国劇場の歌劇部、大阪宝塚の少女劇団などの演ずるものはその一例である」がある。つまり、当時「オペラ」という外来語は日本の歌劇を指すためにも使われていた。現在、「オペラ」は主にクラッシック音楽の一形式である外国のオペラを表し、訳語「歌劇」は広い意味で使われており、日本独自の舞台を指す用語としても用いられている。

「オペラ」は、おそらく英語を通じて日本語に導入されたと思われるが、その定着には複数の言語の影響が見られ、このような場合、荒川の原語多元説が有効であろう。

5.2.「マドンナ」について

「マドンナ」は、madonna の音訳語である。madonna とは、イタリア語で元来、ラテン語 mea domina という表現に由来する第 1 人称所有後接語 ma と名詞 donna「婦人」の複合語で、「我が淑女」の意味を表し、古代イタリア語で婦人の敬称として用いられ、中世文学で恋愛対象の女性を指していた。狭義には聖母マリアのことを表し、この場合は頭文字を大文字で表記することが多い。これは近代イタリア語で一般的な意味となっている。それが転じて、聖母マリアの像や聖母マリアのような美しく純粋な女性を指すようになった。そして、イタリア語から他のヨーロッパ言語に入り、英語やドイツ語(フランス語で変化し、madone と言う)などで聖母マリアの意味、特にその像の転義で美術用語として用いられるようになった。日本語にも導入され、「マドンナ」として定着した。『日本大国語辞典』では「マドンナ」はイタリア語由来とされ、二つの意味が記載されている。一つは「聖母マリア。また、その画像」、もう一つは「多くの男性のあこがれの対象となる女性」である。

明治期の外国語辞典に初めて madonna が記載されたのは、柴田昌吉・子安峻著『附音挿図英和字彙』(1873)であるが、「夫人」と訳されている。しかし、この意味は英語でも古い文語であり、日本語に導入されていなかった。

「マドンナ」は、『角川外来語辞典』(1977)によると明治 23 年(1890)、外山正一の『日本絵画の未来』という演説に聖母マリアの画像の意味で早くも使われている。外山正一(1848-1900)は、イギリスとアメリカに留学したことがあり、優れた英語力の持ち主であった。彼はおそらく英語で書かれた文献を参照し、「マドンナ」という表現を英語から取り入れたのであろう。

この講演に対して森鴎外が同年に『外山正一氏の画論を駁す』と題する反駁を執筆し、この中で彼も「マドンナ」を美術用語として用いた。例を挙げると、「均しく是れ『マドンナ』なり。ラファエルも画き、ガブリエル・マックスも画きたり」とある。森鴎外はドイツ語に堪能であったのはよく知られているが、上述したようにドイツ語でも madonna という借用語が美術用語として使われているため、すでにこの言葉を知っていた可能性がある。外山正一との論争は世の注目を集め、「マドンナ」の美術用語としての定着に与えた影響は大きいと考えられる。

また、イタリア語や英語の madonna は聖母マリアの像、つまり画像だけではなく、彫像なども指すのに対し、日本語の「マドンナ」は当時から、現代日本語と同様に主に聖母マリアの画像の意味という限られた意味で普及した。明治 25 年(1892)に出版された珍田捨巳

校閲・島田豊纂訳『雙解英和大辞典』では、madonna は「聖母の画像」と解釈されている。

この意味では「マドンナ」は夏目漱石著の『吾輩は猫である』(1905)にも現れる。ここには、「ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せろと逼ると同じく、ラファエルに取っては迷惑であろう」とある。また、日本語辞書においては、「マドンナ」は勝屋英造編『外来語辞典』で大正 3 年(1914)、早くも登場し、「聖母マリアの像」と定義されている。このことから、「聖母マリアの画像」の意味で、もはや明治期末に定着していたと考えられる。

「マドンナ」は聖母マリアの呼び名として用いられている例もある。例えば、森鴎外著の『うたかたの記』(1890)に「エヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの図」とあり、人名のように使われている。また、明治 34 年(1901)に出版された森鴎外訳の『即興詩人』の中でも用いられているが、ここでは専門用語ではなく、常に「聖母」に添えて聖母マリアのイタリア語の呼び名として現れている。例えば、ここには「圖の中なる聖母」とある。ところが、聖母マリアの呼び名として、つまりカトリック用語としての用途は定着していない。これは、madonna が聖母マリアの通称としてイタリア語でしか使われておらず、それにイエス・キリストの母を指す訳語として「聖母」が定着しているからであると考えられる。中国語においては、「聖母瑪利亞」という表現がすでにイタリア人宣教師ジュリオ・アレニ(1582-1649)の『職方外紀』に現れる。桃井鶴夫編『アルス新語辞典』(1930)に「(伊 Madonna)聖母マリアの尊稱」とあるが、これは出自とされているイタリア語での意味の説明にすぎない。

「マドンナ」の転義に関しては、『外来語の語源』(1976)に「美人」という意味が日本的であり、明治期に派生していると記述されている。さらに古浦(1997)は意味拡張の例として「マドンナ」を挙げ、「madonna は、イタリア語ではもっぱら『聖母マリア』のことであるが、日本語の『マドンナ』には『憧れの女性』という一般的な意味も生じている」(古浦 1997:66)と指摘している。確かにイタリア語では madonna の一般的な意味は「聖母マリア」ではあるが、「美しい女性」の意味も派生している。その上、「マドンナ」は直接イタリア語からではなく、他の言語、おそらく英語やドイツ語を通じて日本語に入ったため、イタリア語の意味より経由言語の意味と比較すべきであると思われる。英語にも「純粋で美しい女性」の意味が見られ、「美人」の意味が日本的であるとは言いがたいのではないであろうか。

しかし、「憧れの女性」という意味は、他の言語に存在せず、日本で生じた転義である。この意味で最初に使われたのは、夏目漱石著の『坊っちゃん』(1906)である。ここでは「マドンナ」とは男性の憧れの対象である美人のあだ名であり、例えば「今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠けて、マドンナを手に入れる策略なんだろう」とある。漱石が英語の madonna という単語の「美人」の意味を知って、この登場人物に「マドンナ」という名を付けた可能性もあるが、どちらにしても「崇拝する美人」という転義は『坊っちゃん』の中での使用から派生し、「マドンナ」の一般的な意味として普及したと考えられる。

日本語辞書では、この一般的な意味は昭和 6 年(1931)に酒尾達人編『ウルトラモダン辞典』に記録され、「転じて美人に対する敬愛の称」とある。また、千葉亀雄編『新聞語辞典』(1933)にも「転じて美しい女性」と記載されている。このことから、この意味が昭和初期にすでに定着していたことが明らかである。

5.3「キアロスクロ」について

「キアロスクロ」は chiaroscuro という単語の音訳語である。chiaroscuro とは、元来イタリア語の形容詞 chiaro「明るい」と scuro「暗い」の複合名詞で、「明るいことと暗いこと」という意味である。美術用語として「絵画の明暗の配分」及び「光と影の効果により立体感を表現する絵画技法」を表し、転じて「一色の明暗の調子だけで描いた絵」を指す。さらに「豊かな表現力を持った調子・性質の差」、「幸と不幸の繰り返し」を指すようになった。また、他の芸術的な分野においても専門的な意味で用いられるようになり、例えば、音楽用語で音を色に例える比喩表現の一つとして使用され、「音の強弱の変化」を表す。美術用語として英語など、様々なヨーロッパ言語に広まり、音訳語として借用された。意訳語として借用された例(フランス語の clair-obscur やドイツ語の Helldunkel など)もある。日本語にも美術用語として導入され、「キアロスクロ」とイタリア語の発音により近い「キアロスクーロ」という表記で定着した。「キアロスクーロ」は『日本大国語辞典』でイタリア語由来とされ、三つの意味が記載されている。ここでは、「①絵画の明暗法。②一色だけを用い、その明暗で描いた素描。③木版画の一種。二つあるいはそれ以上の同色の板木(はんぎ)の明暗で表現したもの。」と定義され、①は「明暗法」と同義されている。「明暗法」には二つの意味が記載され、一つは「物体や人体を絵画的に表現するときの、光のあった明るい部分と影となる暗い部分を描き分ける方法」である。もう一つは「色のついた紙に、白および暗色で画像を表現

し、明暗による肉付けを強調する版画・素画の一術法。キアロスクーロ」である。

『角川外来語辞典』(1977)によると、「キアロスクロ」が音楽用語としての意味で初めて登場したのは、明治 43 年(1910)の吉田恒三著の『音楽辞書』であり、「濃淡」と訳されている。一方、美術用語としては大正 3 年(1914)発行の『美術辞典』に記録され、「明暗」と訳されている。また、服部嘉香・植原路郎著の『新らしい言葉の字引』(1920)には、イタリア語由来とされ、「キヤロスクロ」と表記されている。ここでは「明暗のコンポジションのこと」と定義されているが、この意味はイタリア語でも英語でも chiaroscuro に見られるのに対して、現代日本語の「キアロスクロ」には残っておらず、絵画技法としての「キアロスクロ」という、最も専門的な意味で定着している。

『角川外来語辞典』(1977)によれば、文学作品において「キアロスクロ」が初めて登場したのは、大正 7 年(1918)の有島武郎著の『生まれいづる悩み』である。「キャロスキュロ」と表記されていることから、英語の発音に影響されていることがわかる。作中、二度用いられているが、二度とも「日光と雲との 明 暗 にいろどられた雪」のように、「明暗」という単語のルビとして使用されている。このことから、外来語としてまだ完全に定着していなかったものと考えられる。また、専門的な意味ではなく、一般的な意味で使われていることから、著者がわざと特別な印象を与えるためにここで美術用語を利用したと思われる。

Chiaroscuro を訳すには様々な訳語が用いられているが、「明暗」はその一つであり、「キアロスクロ」とほとんど同じ時期に chiaroscuro の訳語として使われはじめた。『日本大国語辞典』によると、「明暗」には三つの意味が含まれている。最も古いのは、「明るいことと暗いこと」という意味であり、すでに十二世紀から見られる。この意味から転じて、「喜ばしいことと悲しいこと。幸と不幸」という意味が生じて、イタリア語や英語で発生した chiaroscuro の転義のような意味が日本語にも現れている。もう一つは専門的な意味であり、「絵画・写真などで色の濃淡・強弱や明るさの度合い」と定義されている。「明暗」は、西洋美術用語としての chiaroscuro の概念を日本語で表現するために、おそらく明治後半から使われはじめた。例えば、芥川龍之介著の『開化の良人』(1919)に「図どりが中々巧妙じゃありませんか。その上明暗も相当に面白く出来ているようです」とあり、寺田寅彦著の『自画像』(1920)「ビチューメンで下図の明暗を塗り分けてかかるというやり方であった」とある。

外来語の「キアロスクロ」が専門性の高い用語となり、「明暗効果に基づく絵画技法」を指すようになったのは、透明度の高い「明暗」が「明暗の配分・度合い」という意味で用いられるようになっ

たことが背景にあると思われる。さらに、「明暗」に「法」をつけ、絵画技法としての「キアロスクロ」に相当する「明暗法」という複合語が形成された。これは「明暗画法」ともいう。しかし、「明暗法」はその意味での「キアロスクロ」と同義であるが、版画用語として、つまり「木版画技法の一種」や「その技法を用いた木版画」という、より専門的な意味では用いられていない。このような木版画を指すには、「キアロスクーロ木版画」という混合語を使い、意味を明確にすることもある。また、「キアロスクロ」の最も一般的に用いられている意味は「明暗法」であるが、音訳語の「キアロスクロ」は「明暗法を用いた絵」も表すのに対して、訳語の「明暗」は抽象度が高く、具体的な対象、つまり、いわゆる単色画などは指さない。

もう一つの chiaroscuro の訳語は「濃淡」という古い漢語である。「濃淡」は『日本大国語辞典』で「(色彩・明暗や味、または一般的に程度などが)濃いことと薄いこと。厚薄」と定義され、「キアロスクロ」より意味範囲が広く、専門度が低い。「明暗」の場合と同じように、「濃淡」に「法」をつけ、「明暗法」と同義の専門的な意味を持つ表現「濃淡法」が形成された。「キアロスクーロ木版画」と同義語である「濃淡刷り」という複合語もある。

以上のことから、chiaroscuro の意味が「キアロスクロ・キアロスクーロ」という外来語と複数の訳語に分かれ、「キアロスクロ」がその専門的な意味のみを持っていることが明らかである。

2.4.「マカロニ」について

「マカロニ」は、macaroni の音訳語である。macaroni とは、イタリア語方言・古形 mac(c)arone の複数形が由来で、イタリア語から英語やフランス語に借用された単語であり、「管状のパスタ」を意味する。現代イタリア語標準語では maccheroni「マッケローニ」(単数形は maccherone)という。この単語の語源については色々な説があり、ラテン語 maccare「押しつぶす」から来たという説や、ギリシャ語 makaría「大麦から作られた食物」が由来であるという説などがある。イタリア語では、maccheroni が単純な料理であることから転じて、この単語は「ばか者」も指すようになった。また、中心に穴の開いた筒状のパスタの種類のみを表すようになったのは 19 世紀であり、それ以前はパスタ自体や現在とは異なる種類を指していた。この単語はイタリア語から様々なヨーロッパ言語に入り、英語では 16 世紀末にパスタの意味で使われるようになり、18 世紀に大陸帰りの「伊達男、洒落者」も指すようになった。「マカロニ」は明治期に英語から日本語に取り入れられ、『日本大国語辞典』では「パスタの一種。

中空状の麺で、管状、見殻形、車形などのものがある。グラタン、サラダに用いる」と定義されている。

初めて macaroni という単語が英和辞典に登場したのは、明治 4 年(1871)の前田正穀・高橋良昭編『大正増補和訳英辞林』であるが、「温飩の類」という説明的な表現を使って訳されている。

マカロニは日本に紹介された最初のパスタの種類であり、明治期の西洋料理書では明治 5 年(1872)に敬学堂主人著の『西洋料理指南』に紹介されている。ここにはマカロニの図が載せられ、以下のように記されている。

> 圖ニ示セル竹管ノ如キハ器械ヲ以テ製セリ我國此器械ナシ故ニ方今用ユル温飩ノ形チニ製シテ圖ノ長サニ剪リテ代用ス(敬学堂 1872:下 27)

この書籍では様々なカタカナ語が使用されているにもかかわらず、macaroni は「温飩」と訳されており、「マカロニ」のような音訳語は用いられてない。

一方、macaroni に相当するカタカナ語は同年発行の仮名垣魯文著の『西洋料理通』に初めて現れる。この本は横浜に居留していたイギリス人の手控え帖を種本として書かれたもので、マカロニのことを「素麺」と訳しているが、例えば「『マカロニースープ』素麺汁」と記載され、「マカロニー」という音訳語として用いられている。

翌年に出た柴田昌吉・子安峻編『附音挿図英和字彙』には macaroni は「通心麺」と訳されている。これは明治期の英和辞典においては最も使用されている macaroni の訳語であり、柴田昌吉・子安峻編『附音挿図英和字彙』(1873)、ノア・ウエブストル原著・早見純一訳述『英和対訳辞典』(1885)、イーストレーキ・棚橋一郎共訳『和譯字彙：ウェブスター氏新刊大辭書』(1899)で用いられている。また、これ以外、P. A. Nuttall 原著・棚橋一郎訳『英和雙解辞典』(1886)に「温飩ノ類」、尺振八訳『明治英和字典』(1884-1889)に「素麺(管状)」という既存の表現が見られる。

しかし、現代中国語では同形の「通心麺」やこれに非常に近い「通心粉」が macaroni の訳語として使用されているのに対し、日本語では「通心麺」という訳語は定着しなかった。W. Lobscheid 著の *English and Chinese dictionary*(1866-1869)では macaroni は「通心粉、路粉」と訳されており、かつ日本語の資料では常に「通心麺」に「スノアルソウメン」という注釈のルビが振られていることから、この表現が中国語の影響で当時の英和辞典に登場したと考えられる。

西洋の食文化に関する作品以外にも、明治 26 年(1893)の松原岩五郎著の『最暗黒之東京』にも「マカロニー」が登場し、「一碗五厘

的の『マカロニー』を」とある。また、同じ語形で macaroni に相当する外来語は、夏目漱石著の『三四郎』(1908)の中で用いられ、ここには「今日は伊太利人がマカロニーを如何にして食うかと云う講義を聞いた」とある。さらに、『即興詩人』(1901)で森鴎外は、イタリア語の単語 maccheroni の発音に近い意訳語を用い、「『マケロニ』(麪類の名)」と記している。しかし、これは例外的なケースにすぎず、後に使われた形跡はない。

現在、定着している「マカロニ」という語形は、明治後年に現れ、すでに広まりはじめていた「マカロニー」より遅くに登場した。いまだ表記の揺れは見られるが、「マカロニー」に取って代わってしまったと言えるほど普及している。明治 42 年(1909)に永井荷風著の『ふらんす物語』で使用され、ここには「マカロニの煮込みと名も知れぬ安葡萄酒で」とある。また、大正 3 年(1914)発行の野村泰亨・中澤文三郎・阿部漸共著『佛和新辭典』に macaroni が掲載され、「マカロニ、官麵」と訳されている。この表記の普及とこの単語自体の定着には、フランス語の macaroni の影響があった可能性があると考えられる。

外来語辞典においては、「マカロニ」は大正 3 年(1914)に『日本語外来語』に現れ、「干饂飩ノ一種」と定義されている。田中孝一郎編の『新しい外来語の字引』(1924)にも見られ、「管状饂飩」と訳されている。一方、昭和 5 年(1930)発行の横山青娥著の『全・外来語辞典』では、他の辞書では「マカロニ」ではなく、「スパゲッティ」の訳語として用いられている「西洋うどん」が使用されている。

最近、イタリア語の発音に近い「マッケローニ」という語形が特にイタリアンレストランのメニューなどに見られるようになったが、この単語はまだ定着していないようである。

6. 終わりに

イタリア語由来の外来語は、明治期から日本語の語彙に導入されはじめ、無視できない影響を与えてきた。時代を超えて、特に速度・発想標語、音楽様式、楽器名などの、音楽用語が数多く見られ、音楽分野における役割が非常に大きいと言える。しかし、本稿では明治期に注目し、4.1 節で紹介した例を分析した結果、イタリア語由来の語彙のこの特徴はすでに明治期に現れていることがわかった。明治期に導入された例の中でも音楽関連の語彙が大部分を占めており、その中には「オペラ」「ソプラノ」「ピアノフォルテ」「オーボエ」「シンフォニア」「ソナタ」のような重要な用語も見られる。その次に多いのは美術・建築関連の用語である。意味分野に関して

は、明治期におけるイタリア語由来の外来語は、大きく二つの種類に分けることができるであろう。一つは、特定の分野、主に音楽・美術関連の専門用語である。このカテゴリーに属する語彙は圧倒的に多い。もう一つは、イタリア固有の文化、名物である。後者には料理関連の単語も含まれ、数は少ないが、「マカロニ」「スパゲッティ」のようなイタリアの食文化を代表するものも見られる。

しかし、イタリア語由来と言っても、カタカナ語という形で日本語に取り入れられた言葉は、英語、フランス語、ドイツ語など他の言語にも借用されているケースが多い。先行研究ではイタリア語由来の借用語は直接イタリア語からではなく、他の言語を通じて日本語に入った場合が多いであろうという指摘がされている。そこで、明治期におけるイタリア語を原語とする語彙の伝達ルートについて考察し、イタリア語由来の外来語が集中する分野を代表する「オペラ」「マドンナ」「キアロスクロ」「マカロニ」という 4 つの個別語について検証した。その結果、明治期に関しては、他の言語を経由して間接的に取り入れられた場合が多いという結論に至った。現代に定着している語形にイタリア語の直接的な影響があったと思われる事例も見られるが、イタリア語からの直接借用はより最近の現象であると考えられる。イタリア出身のお雇い外国人の存在や、『佛伊和三國通語』の発行が証明しているように、イタリア語との言語接触が生じていたのは明らかである。しかし、語彙にはその接触の影響が見られないのである。

最後に、意味分野の分布と伝達ルートについて調査した結果、明治期におけるイタリア語由来の語彙は、美術や、特に音楽の分野における世界共通語としてのイタリア語の役割を強く反映することがわかった。これは他の言語と比べてもイタリア語の大きな特徴と言えよう。間接的な影響と言っても、イタリア語は明治期の専門用語の成立に有意義な役割を果たしたと考えられるのである。

参考文献

和文

荒川惣兵衛,『外來語概説』, 東京, 三省堂, 1943.

石井正彦,「外来語の 20 世紀」,『日本語学会 2007 年度春季大会』, 日本語学会, 2007, 15-20.

石綿敏雄,『外来語の総合的研究』, 東京, 堂出版, 2001.

市河三喜, 「外来語について」, 音声学協会編, 『ことばの講座』, 第一輯, 東京, 研究社, 1931, 94-120.
楳垣實, 『日本外來語の研究』, 東京, 青年通信社, 1943.
敬学堂主人, 『西洋料理指南』, 東京, 雁金書屋, 1872.
古浦敏生, 「日本語におけるイタリア語からの借用語」, 『広島大学文学部紀要　第 57 巻特輯号 3』, 広島, 広島大学文学部, 1997.
国立国語研究所, 『現代雑誌九十種の用語用字　第 1 分冊：総記および語彙表』, 東京, 秀英出版, 1962.
国立国語研究所, 『現代雑誌九十種の用語用字　第 3 分冊：分析』, 東京, 秀英出版, 1964.
坂田俊策, 「外来語辞書の分類」, 『横浜国立大学人文紀要. 第二類, 語学・文学』, 横浜, 横浜国立大学, 40, 1993, 131-145.
朱京偉, 『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に』, 東京, 白帝社, 2003.
新村出, 『外來語の話』, 大阪, 新日本圖書, 1944.
田中秀央, 『語源百話：文化史的に見た外来語』, 東京, 南江堂, 1972.
日伊協会, 『日伊文化交渉史』, 東京, 日伊協会, 1941.
日伊協会編, 『幕末・明治期における日伊交流』, 東京, 日本放送出版協会, 1984.
日本近代洋楽史研究会編著, 『明治期日本人と音楽：日本近代音楽館「新聞記事にみる日本の洋楽」プロジェクトの調査に基づく』, 立川, 大空社, 1995.
パテルノストロー, 『法理学講義』, 宮城浩蔵訳, 東京, 明治法律学校講法会, 1889.
パテルノストロー, 『法理学』, 東京, 明治法律学校講法会, 1898.
増井敬二, 『日本のオペラ：明治から大正へ』, 東京, 民音音楽資料館, 1984.
森征一, 「司法省お雇いイタリア人アレッサンドロ・パテルノストロ来日の経緯」, 『法學研究：法律・政治・社会』, 東京, 慶應義塾大学法学研究会, 53(12), 1980, 265-284.
ユーシー, 『音楽問答』, 滝村小太郎訳, 神津専三郎校, 東京, 文部省, 1883.
ユネスコ東アジア文化研究センター編, 『資料御雇外国人』, 東京, 小学館, 1975.

欧文

CALVETTI Paolo, "Prestiti italiani nella lingua giapponese. Note sul contatto linguistico tra Italia e Giappone", in TAMBURELLO Adolfo (ed.), *Italia-Giappone 450 anni*, Roma – Napoli, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente - Università degli studi di Napoli "L'Orientale", II, 2003, pp. 795-809.

CORRADINI Piero (ed.), *Atti del convegno internazionale "Cinquecento anni di rapporti culturali tra Italia e Giappone": Sendai-Kawasaki-Tokio 6-9 novembre 2001*(国際シンポジウム日伊文化交流の 500 年報告書：仙台・川崎・東京 2001/11/6-9), Roma, Dimensione Stampa, 2003.

LOMBARDI VALLAURI Edoardo, "Adattamento dei prestiti e apprendimento dell'italiano da parte di giapponesi", in BANFI Emanuele – IANNÀCCARO Gabriele (eds.), *Lo spazio linguistico italiano e le lingue esotiche, Atti del XXXIX Congresso della SLI*, Roma, Bulzoni, 2006, pp. 157-180.

LOVEDAY Leo J., *Language Contact in Japan: A Socio-linguistic History*, Oxford, Clarendon Press, 1996.

NANNINI Alda, "Wago, kango, wasei-eigo... wasei-itariago?", in GRANDI Nicola – IANNÀCCARO Gabriele (eds.), *Zhì. Scritti in onore di Emanuele Banfi in occasione del suo 60° compleanno*, Cesena, Caissa Italia, 2006.

NAGAMI Satoru - NANNINI Alda, "Italianismi in giapponese, nipponismi in italiano", in BANFI Emanuele – IANNÀCCARO Gabriele (eds.), *Lo spazio linguistico italiano e le lingue esotiche, Atti del XXXIX Congresso della SLI*, Roma, Bulzoni, 2006 pp. 117-156.

電子文書

芥川龍之介, 「開化の良人」, 青空文庫, 1998.
有島武郎, 「生まれいずる悩み」, 青空文庫, 2000.
アンデルセン ハンス・クリスチャン, 「即興詩人」, 森鴎外訳, 2005.
寺田寅彦, 「自画像」, 青空文庫, 2003.
夏目漱石, 「明暗」, 青空文庫, 1999.
夏目漱石, 「坊っちゃん」, 青空文庫, 1999.
夏目漱石, 「吾輩は猫である」, 青空文庫, 1999.
夏目漱石, 「三四郎」, 青空文庫, 2000.
森鴎外, 「かのように」, 青空文庫, 1999.

森鴎外, 「うたかたの記」, 青空文庫, 2000.
「外来語の表記」（平成三年六月二十八日 内閣告示第二号）, 1991, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19910628002/k19910628002.html.

辞書

あらかわそおべえ, 『角川外来語辞典』, 第二版, 東京, 角川書店, 1977.
イーストレーキ・棚橋一郎共訳, 『和譯字彙 ウェブスター氏新刊大辭書』（近代日本英学資料 4）, 東京, ゆまに書房, 1995.
飯田隆昭・山本慧一共編, 『日本語になった外国語辞典』, 川本茂雄監修, 第 3 版, 東京, 集英社, 1994.
勝屋英造編, 『外来語辞典』（近代用語の辞典集成 25）, 東京, 大空社, 1995.
木正栄ほか編, 『諳厄利亜語林大成』, 東京, 大修館書店, 1982.
「現代用語の基礎知識」編集部編, 『カタカナ・外来語/略語辞典』, 堀内克明監修, 東京, 自由国民社, 1999.
楳垣實編, 『外来語辞典』, 第 3 版, 東京, 東京堂, 1966.
斎藤竜太郎編著, 『文芸大辞典』(近代用語の辞典集成 29), 東京, 大空社, 1994.
酒尾達人編, 『ウルトラモダン辞典』（近代用語の辞典集成 25）, 東京, 大空社, 1995.
三省堂編修所編, 『コンサイス・カタカナ語辞典』, 第三版, 東京, 三省堂, 2005.
島田豊編, 『附音挿図 和訳英字彙』（近代日本英学資料 9）, 曲直瀬愛校訂, 杉浦重剛・井上十吉校閲, ゆまに書房, 1995.
小学館国語辞典編集部編集, 『日本国語大辞典』, 第二版, 東京, 小学館, 2001.
田中信澄編輯, 『音引正解近代新用語辞典』（近代用語の辞典集成 9）, 東京, 大空社, 1994.
千葉亀雄編, 『新聞語辞典』（近代用語の辞典集成 37）, 東京, 大空社, 1996.
ノア・ウエブストル, 『英和対訳辞典』, 早見純一訳述, 大阪, 大阪国文社, 1885.
野村泰亨・中澤文三郎・阿部漸, 『佛和新辭典』, 東京, 大倉書店, 1901.
服部嘉香・植原路郎, 『新らしい言葉の字引』改訂増補（近代用語の辞典集成 2）, 東京, 大空社, 1994.

堀達之助編,『英和対訳袖珍辞書』, 武蔵野, 秀山社, 1973.
曲木如長,『佛伊和三國通語』, 東京, 績文社, 1876.
村上英俊編,『仏語明要』, 東京, カルチャー出版社, 1975.
桃井鶴夫編,『アルス新語辞典』(近代用語の辞典集成 14), 東京, 大空社, 1995.
矢崎源九郎,『日本の外来語』, 東京, 岩波書店, 1979.
横井忠夫,『外来語語源ものしり辞典：これだけは知っておきたい精選 451 語』, 東京, 大和出版, 1979.
吉沢典男・石綿敏雄,『外来語の語源』, 東京, 角川書店, 1979.
吉田恒三編,『音楽辭書』, 大阪, 開成館, 1910.
NUTTALL P. A. 原著・棚橋一郎訳,『英和雙解辞典』(近代日本英学資料 2), 東京, ゆまに書房, 1995.
LOBSCHEID William,『英華字典 = English and Chinese dictionary: with the Punti and Mandarin pronunciation』, 東京, 東京美華書院, 1996.